

HIMALAYA

ヒマラヤ

No. 194

特集 ラプチェ・カン初登頂



1988 JANUARY

日本ヒマラヤ協会



THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN — HAJ

1988年 HAJ登山隊員募集

東コンロンの雄峰

新青峰(6,860 m) — 未踏峰

チベットと青海省に跨がる世界の屋根、青藏高原には恰も宝石をちりばめたように無数の湖水が点在します。その一つ可可西里湖の北にひっそりと聳える東崑崙の秘峰が新青峰（別名モノマハ、6,860 m）です。

記

時 期 1988年 5月～7月
（本年の偵察結果により時期を変更した）
募集人員 10名
負担金 100万円
資 格 冬山経験4年以上のHAJ会員（会員外の希望者は別途協議します。）
申込み先 HAJ事務局まで
〆 切り 定員になり次第〆切ります。

海子山塊の神峰

ゲニ峰(6,204 m) — 未踏峰

昨夏、悪天候に阻まれて断念となりましたゲニ峰（四川省海子山塊）へ、今年、再度、登山隊を派遣することになりました。

1987年の失敗を教訓にし、時期の変更、ルートの再検討を重ね、再度万全の体制で挑みます。

記

時 期 1988年 5月～6月（約45日間）
募集人員 6名
負担金 70万円
資 格 冬山経験4年以上のHAJ会員。会員外の希望者は別途協議致します。
申込み先 HAJ事務局まで
〆 切り 定員になり次第〆切ります。

表紙写真

未知の山群ラプチェ・カンには、4つの7,000 m峰がある。主峰の西にある7,072 m 峰はヒマラヤ巒の美しい双耳峰であり登路は西方と思われる。
（日中友好ラプチェ・カン合同登山隊）

ヒマラヤ No.194

1. PEOPLE

2. 特集 ラプチェ・カン初登頂

— HAJ・西藏登山協会合同登山の記録 —

19. ヒマラヤニュース〈地域ニュース・インフォメーション〉

21. ヒマラヤ登山入門 インド・ヒマラヤ編(7)

24. 寸感・事務局日誌

1987年秋に実施された日本ヒマラヤ協会とチベット登山協会の合同による「日中友好ラブチュ・カン合同登山隊」は、10月26日と27日の両日にわたり日本側7名中国側8名の計15名が未踏峰としては世界第5番目の標高である7,367mの頂上に立ち、成功裡に終了した。

登山の成功は勿論隊員全員の協力に依るものであるが、隊長を務めた成天亮氏の人柄に負うところも少なくないと思う。

成天亮氏は、1940年11月6日に陝西省富平県に生まれた。18才で人民解放軍（蘭州）に入り、20才の時に軍命により登山を始めた。

1960年春のチョモランマ登山では、8,100mまで登っている。1960年秋のナムチャバルワ偵察を皮切りに翌年はシジャパンマを偵察。この時女子隊のためにと、今回登ったラブチュ・カン周辺も偵察した。1963年～64年は、ボゴダ等でトレーニングを行い、1964年5月2日最後の8,000m峰といわれたシジャパンマの初登頂に成功している。その後もチョモランマの偵察やトレーニングを続けていたが、文化大革命のため登山活動は中止された。

1973年から岩登りトレーニングを再開し、ラサに戻りチョヨランマ登山の準備に入った。翌年は北東コルやロー・ラから西稜の偵察などを行い、1975年のチョモランマ登山では8,700mまで登っている。この登山の後で鄧小平氏など首脳を囲んだ記録写真には、懐かしい顔ぶれが大勢みえる。

その後は登山そのものの現場から降りて、もっぱら管理側になった。

外国隊にチベットの山々が開放されてからは、連絡官として、1980年西ドイツ隊のシジャパンマや1982年メスナーのチョモランマ、日本隊では、1982年大分のポーロンリ、高山研のシジャパンマなどの連絡官を務めている。

1983年～84年には、ナムチャバルワの偵察に入り、1985年チベット自治区成立20周年を記念して派遣したチャー・オー隊の隊長を務め9名を頂上に立たせることに成功した。そして1986年には日中合同のチャンツェ峰隊長も務めた。



成天亮氏は現在、チベット登山隊々長の要職にある。チベット登山隊は40数人から成り、副隊長として、シジャパンマ、チャー・オーの二つの8,000m峰の登頂者である仁青平措と、1975年チョモランマ登頂者である桑珠の両氏が務めている。

今回の合同登山の中では、中国側と大きく意見の相違する場面が二度あった。第一番目は、彼等の行動計画が私が考えているものとあまりにもかけ離れていた。極端にいうと、半分の日数で登頂しようというものであった。この時は、我々の主張をじっくりと聞いてくれて、あっさりと言歩してくれた。

二番目は、嵐の後の作戦の変更であった。日程的に最後の賭になる公算が強いアタックを確実にものにするために、少人数の登頂に切り換えようと提案された。この時も、私の日本側の立場を良く理解されて全員による登頂へのトライを許可してくれた。

結果が自分にとってマイナスになる可能性がありながら、相手の立場を最大限理解し決定することは、なかなかできない事である。成天亮氏はそのような事を風のように飄々として決定された。温厚な中に強い意志を持った人である。

Mr. Cheng Tian Liang

1940年11月6日生れ

1958年11月 人民解放軍入隊

1960年1月 軍命により登山開始

1964年5月 シジャパンマ初登頂

現在チベット登山隊々長、二男一女あり。

1987年

ラブチェ・カン初登頂

—HAJ・西蔵登山協会合同登山の記録—

はじめに

1985年夏、稲田専務理事と私は、北京から成都を経てラサを訪問し、HAJの今後の登山・踏査計画の渉外活動を行った。その折に多忙な時間を割いて地形図を見る機会に恵まれた。様々な地形図を一枚一枚丹念に見る暇はなかったが、氷河が集中している地形図が目に入った。

そこは、7,000m峰数座を含む巨大な山塊であった。信じ難いことに、その地域はチョー・オユーとシシャパンマの二つの8,000m峰に挟まれ、中国ネパール友好道路のすぐ近くにあった。どうしてこのような巨大な山塊が登山界の話題にもならず存在しているのだろうか？

私達がすぐさまにこの山に登りたい旨、口頭で申請したのは言うまでもない。やがて、時は過ぎこの「ラブチェ・カン」と呼ばれる山は、HAJとチベット登山協会の合同で登山することが決まった。1986年3月には、稲田、尾形がラサを訪問して合同登山の仮調印を行い、9月には齊藤安平、熊田雅史の両名とチベット側により、登路の偵察が行われ、その北面側が探られた。11月末には、チベット登山協会の責任者であるローサン・ダワ副主席を団長とする4名の代表団を東京に招請し、正式に合同登山の議定書が交換されたのであった。

ここまで順調であった本登山であったが、年が明け1987年の実施年に入ると、大きな壁が私達の

前に立ちはだかった。大きな壁の重圧に隊員は不安を抱きながらも準備を進め、7月初めには別送品を送り出し、ひたすら事態の好転を待ったのであった。

壁は幾つもの要素から構成されており、複雑にからみあい、解決するためには時間が足りないようにも思われた。

HAJにとって渉外の困難は、活動の一方の柱でもあった。困難な壁を解決できないような脆弱な体質にはない。誰かが解決するのではなく、自ら解決に努力しなければならなかった。

本登山の現場も困難の連続であった。合同登山の難かしさは現場にいななければなかなか理解しにくい。本報告の中にその苦勞を読みとっていただければ幸甚である。

(記：山森 欣一)

登山隊の概要

1. 目標の山

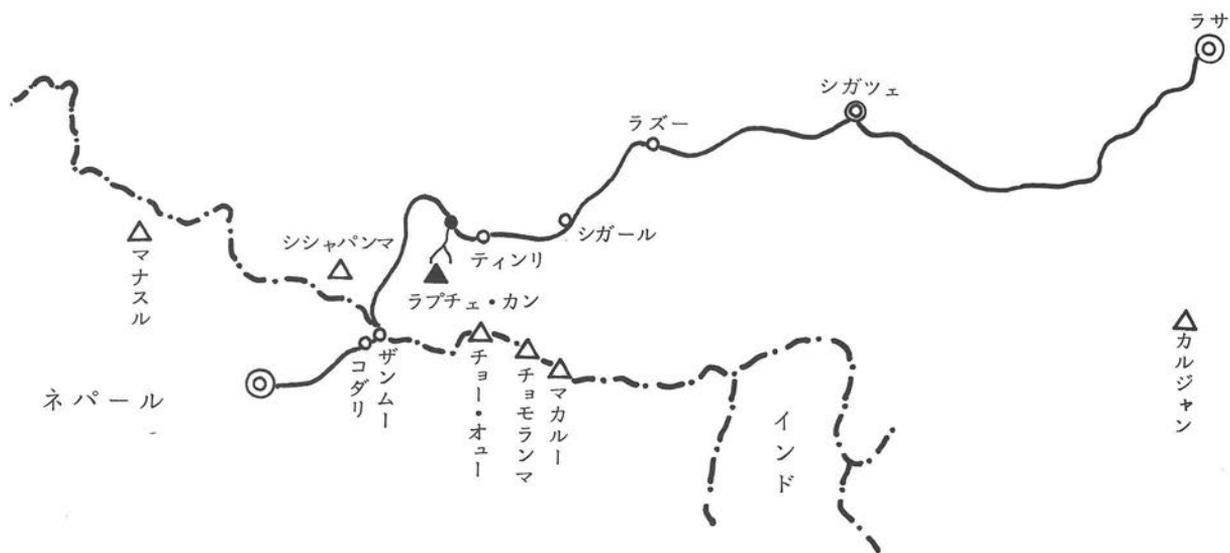
山名：ラブチェ・カン（拉布及康、Labuche Kang）

高度：7,367m 未踏峰では世界第5位の標高

位置：ラサの南西約480km チベットとネパール国境近く

2. 登山期間

1987年9月10日～11月9日（61日間）



3. 目的

- 1) 日中合同によるラプチェ・カン峰の初登頂
- 2) 日中両国の登山交流と親善
- 3) チベットの自然・民族・生活等の撮影

4. 隊の名称

日中友好ラプチェ・カン合同登山隊1987
(Japan-China Friendship Joint Expedition 1987)

5. 派遣母体

日本ヒマラヤ協会

隊員構成 (年令は11月9日現在)

日本側

隊長：山森欣一(Kinichi Yamamori) (43才)
副隊長：出口 當(Ataru Deguchi) (45才)
隊員：小川貞夫(Sadao Ogawa) (40才)
隊員：森山安次(Yasuji Moriyama) (37才)
隊員：古川英勝(Hidekatsu Furukawa) (35才)
隊員：須藤圭一(Keiichi Suto) (34才)
隊員：橋本康弘(Yasuhiro Hashimoto) (33才)
隊員：田辺 治(Osamu Tanabe) (26才)
隊員：高橋俊也(Toshiya Takahashi) (26才)

中国側

隊長：成 天亮(Cheng Tian Liang) (47才)
副隊長：旺 加(Wangjia) (30才)
隊員：加 拉(Gyala) (24才)

隊員：達 穷(Daquiog) (24才)
隊員：阿克布(Akapu) (25才)
隊員：拉 巴(Lhaba) (23才)
隊員：普 布(Pupu) (23才)
隊員：佟 璐(Tonglu) (25才) 女
隊員：拉 吉(Lhaji) (17才) 女

アドバンス・ベース・キャンプを目指して

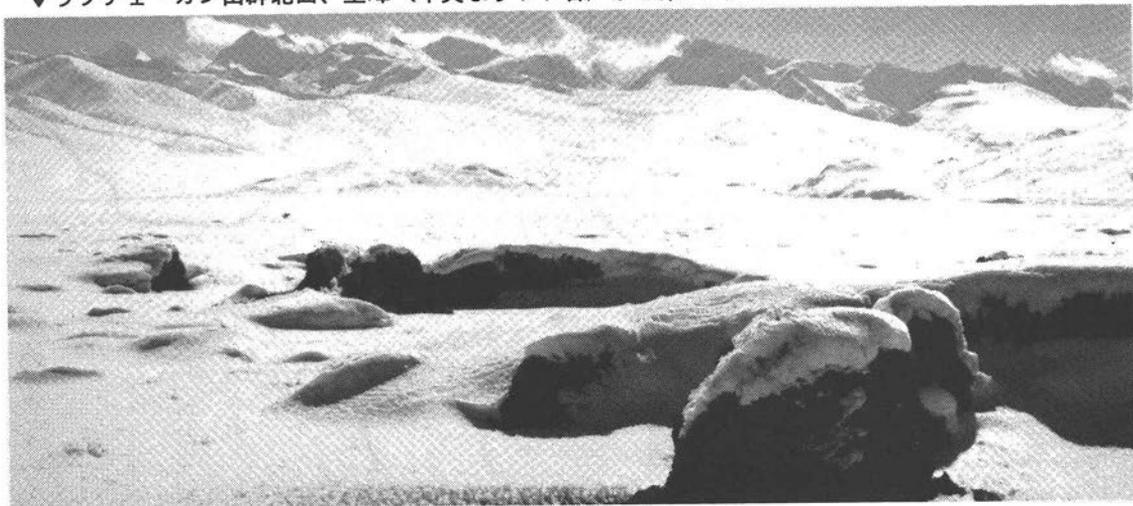
9月10日 ビザがギリギリまで取得できず、出発を危ぶむ声も聞かれたが、何とか予定日に間に合った。

北京着14時2分。荷物の通関は簡単に済み、出迎えの隊員佟璐とCMA王氏と共に北緯飯店へ。汪鉄銘先生は多忙で立話して済ませた。CMAも三国チョモランマ関係の応対で多忙の様子。

9月11日 9時過ぎに天壇公園に出発。10時過ぎにホテルに戻り早い昼食を食べて空港へ。空港へ向かう車の中で汪鉄銘先生と打ち合わせ。成都の空港には、李慶と羅凡が迎えに来ていた。我々の通訳の事で話がまとまっていなかったことが判った。錦江賓館に入り、夜は四川省登山協会の曾副主席とホテルで打合わせした。

9月12日 6時20分過ぎに空港に到着すると雨であった。機上からはゲニと海子山、理塘などが確認できたが、ギャラ・ベリやナムチャバルワは見えなかった。ラサの空港に10時10分到着。今日は

▼ラブチェ・カン山群北面、主峰（中央よりやや右）から東に7,000m級の未踏峰が数座連らなる。



カトマンズ～ラサ間の一番機が飛ぶとのことで空港ではマイク台がセットされていた。

成天亮隊長、桑珠先生などに迎えられて、ジープとバスに分乗して拉萨飯店へ。通訳がないので少々不便であるがたいした支障はない。

ホテルにローサン・ダワ先生、ゴンブ先生の首脳が訪ねて来られた。夜になって通訳が到着した。ラサの初日は辛い。高橋は熱を出して食事もしないで寝ている。他の隊員も一様に声が低い。

9月13日 隊荷の整理。16時からローサン・ダワ、成天亮、高謀興の諸先生と打合わせ。18時30分からチベット料理による歓迎会。30～40品の料理が出る豪華なものであった。

9月14日 隊荷の整理。夕方トラックへ荷の積み込みをしていると、2つの荷が北京から届いていないことが判った。折よく大分の伊東氏がおられたので一部借用した。最近の中国登山では荷が届かないことがちょくちょくある。

9月15日 ローサン・ダワ先生以下登山協会首脳の盛大な見送り（カタを授かりチャンをいただく）を受けて8時40分拉萨飯店前をバス1台、ジープ1台、トラック2台に分乗して出発する。この日は午後10時過ぎにシガツェの第二招待所に到着。

9月16日 ラズーから南下してシガールでパスポートのチェックを受け、18時15分ティンリの手前で待望のラブチェ・カンの雄姿を見る。左からチュモランマ、ギャチュンカン、チョー・オユーと続き、右に大きくラブチェ・カンを見ることができ一大展望と云って良いだろう。この景観を見

た人は多いはずだが、話題にならなかったのは不思議でさえある。ティンリからザンムーに向って20分ほど進んだ所に「参木达」と標識が立てられている。そこを右に入り相当の悪路を50分ほどでベースキャンプである朗果村に到着した。20時30分。強風の中で中国製大テントを4張建てた。バスは更に2時間遅れて着いた。4,500mの高所で茶一杯を飲んで早々にシュラフにもぐり込んだ。

9月17日 ウドンを食べて再梱包作業を行う。フィックス用のロープ切りには成隊長以下チベット側も動員して行う。テントの周りには、ヤクを連れた朗果村の人が見物に集まりなかなかぎやかである。18時30分から国旗の掲揚、隊員紹介とベースキャンプ開きを行う。遙か彼方に軍艦のように巨大な姿を浮かべるラブチェ・カンの雄姿を眺めながらの大宴会は、陽が沈んでから場所を日本側テントに移して延々と続いた。

9月18日 休養日、洗濯、手紙、甲羅干し。

9月19日 裏山へ高所順応

9月20日 ABCへ移動する日。隊荷は既にヤク50頭によってABCへ運ばれている。21kmの長い高原歩きである。この日、山森、出口、小川の40才台コンビ3名は、途中から道を誤まり西の峠を越えて5,100mでフォースト・ビヴァークとなった。このため日本側6名とチベット側2名は、24時頃まで捜索に時間を費したが発見できなかった。ABCは、錯朗瑪の北岸の下にあり、地形的に常時南西の風が吹き荒れる場所である。既に高原は晩秋であり咲く花もほとんどない荒涼とした世界であった。

（記：山森 欣一）



ABC から C1へ

ABCからC1までの直線距離は、約7 km位あり、高度差は約300 m位で、C1はABCの南西方向に位置する氷河上にある。

ABCからC1までの地形は大きく分けると、湿地、氷河のモレーン、氷河湖、氷河舌端、ガレている斜面、氷河上とに分類される。

ここの湿地は高度が高い為に、草類はほとんどなく、苔類と思われる物で、色は黄色に近い茶色である。

氷河湖の大きさは奥行きは約5.5 kmで幅は約800～900 m弧を描いた長方形に近い形をした湖である。

氷河舌端はセラック帯のようになって、氷河湖の最奥部に位置し、たえず崩壊を繰り返しながら氷河湖に氷を落していた。

ABCからC1に行くには、まず、ABC周辺の石だらけの所を避けながらなるべく池塘や、泥のある所を選びながら歩くこと10分位でモレーンのふちに着き、モレーンの丘を右手に見ながら、氷河湖から流れ出している川に沿って、飛び石伝いに歩いたり、池塘の上を歩いたりすること5分位行くと、氷河湖の湖畔に出る。ここから氷河湖の最奥部もはっきり見え、氷河が、アイスフォールとなって氷河湖に落ちているのも見える。

ここから湖の右手を歩き出すのであるが、湖の最奥部までの距離は見た感じではそう遠くなさそ

うと思われたが、実際の湖の形は弧を描いておりしかも、入江や崎が重なりあっており、湖の奥行き距離よりか、はるかに長い距離を歩くことになった。

湖畔の歩きだしは、ガレた石ころだらけの所をトラバースするのであるが、初めの頃は歩きづらかったが、数回、人が往来しだした頃から、歩きやすくなった。ここを過ぎると今度は、地塘と石ころだらけの所が何回か繰り返しがああり、最後にある苔の池塘の乾いた所などはテントも張れるような大きさであった。

ここを過ぎると、C1からABCに戻ってくる時に必ず休憩をする、砂と砂利混じりの渚となった所がある。C1からABCに戻ってくる時は、ここでABCまでは、あと1時間以内に戻れると思うし、ABCからC1に行く時は、湖畔を $\frac{1}{2}$ 歩いて来たなと思う場所で、湖畔を歩く時の1つの目標地点となった。

この渚から先は飛び石伝いに歩いたり、石と泥の混じり合った所を歩いて行くと、目の前が行き止まりとなり、湖畔の水際をへつるようになる。朝は足元に氷がついており、C1に行く時は、慎重に歩いた所である。このような水際を歩く場所は2ヶ所あり、これを過ぎると、丸い石の所がある。さらに進むと、今度は、角のある赤茶色の石が現われ、これを過ぎると2 m位の岩壁が進路を妨げるようになるが、簡単に登下降することができる。岩壁の反対側は傾斜のゆるい泥まじりの斜面であった。



この壁もこの湖畔を歩く時の時間的な目安となる地点であった。この地点は湖の最奥部の我々が登山を開始する所までの中間デポ地であり、しかも、フィックス・ロープを張り始めた地点まで約30～45分かかる場所であった。

この壁を過ぎると湖の最奥部までの進路は、ほとんど、角のある石だらけであり、水際に近い所を歩いて行くのでアイスフォールが真近に感じるのであるが、湖畔が幾つかの入江と崎からなっている為に時間が、思ったよりかかってしまう。

この角のある石だらけの所を過ぎて少し歩くと前方に岩場があり、進路を妨げてしまう。ここより上部のガレ場を登り、アイスフォールを回りこんで氷河上のC1に行くルートを取ることにした。この岩場の手前の所は、我々が登山開始時に一気にC1まで荷上げができなかった為に、中間デポ地とした所であり、ガレ場を登る為にフィックス・ロープを最初に張った所である。

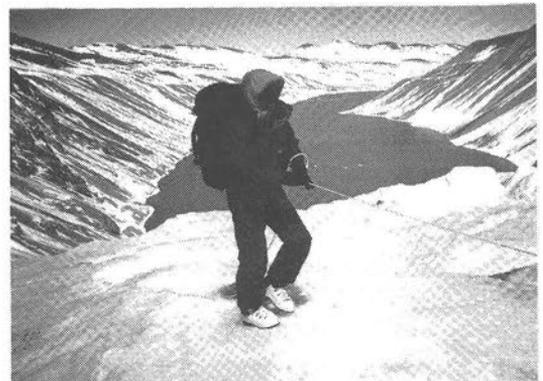
岩場手前のガレ場をフィックス・ロープで1ピッチ半位い登り、その後、ガレ場を左上にフィックス・ロープに沿って3ピッチ半位い登ると傾斜もゆるくなり、トラバースとゆるい登りのガレ場なのでフィックス・ロープは使用しなかった。

フィックス・ロープを張ったガレ場も最初の直上ルートは、人が下にいると落石を落さないように慎重に登下降するのであるが、落石を起してヒ

ヤリとする場面もあった。左上する所は、落石を起しても人には当らずに済み、しかも何人も人間が往来したので、数日で、ふみ跡もしっかりして非常に楽になった。

5ピッチフィックス・ロープを登った後は、傾斜のゆるいガレ場を水平より、左上ぎみにトラバースをして行くと、ちょっとしたガレたルンゼに出る。このルンゼを直上するとハングにぶつかり左へトラバースすると小さな丘の上に出る。もうここはアイスフォールを左下に見る位置であり、ここから先は、砂利の下は水になっている丘を幾つか越えていくと氷河の端に着く。ここからC1までフィックス・ロープは7ピッチ張られた。

氷河の端からC1までは、大小さまざまなクレバスがあり、しかも滑りやすいつるつるの氷面になっているため、傾斜がゆるいわりにはフィック



▲C1下から錯朗瑪を見下ろす。

ス・ロープが有効であった。

C1は氷河の端にあるだけに、2m位の割れ目が周辺に幾つか見られた。又、ここは風の通り道のために積雪は少なかったが、テントの下が氷になっているため昼間、テントの下の氷が融けるとテントが水浸しになってしまうこともあった。

(記：森山 安次)

C1～C2ルート工作記

9月30日 天気 晴れ

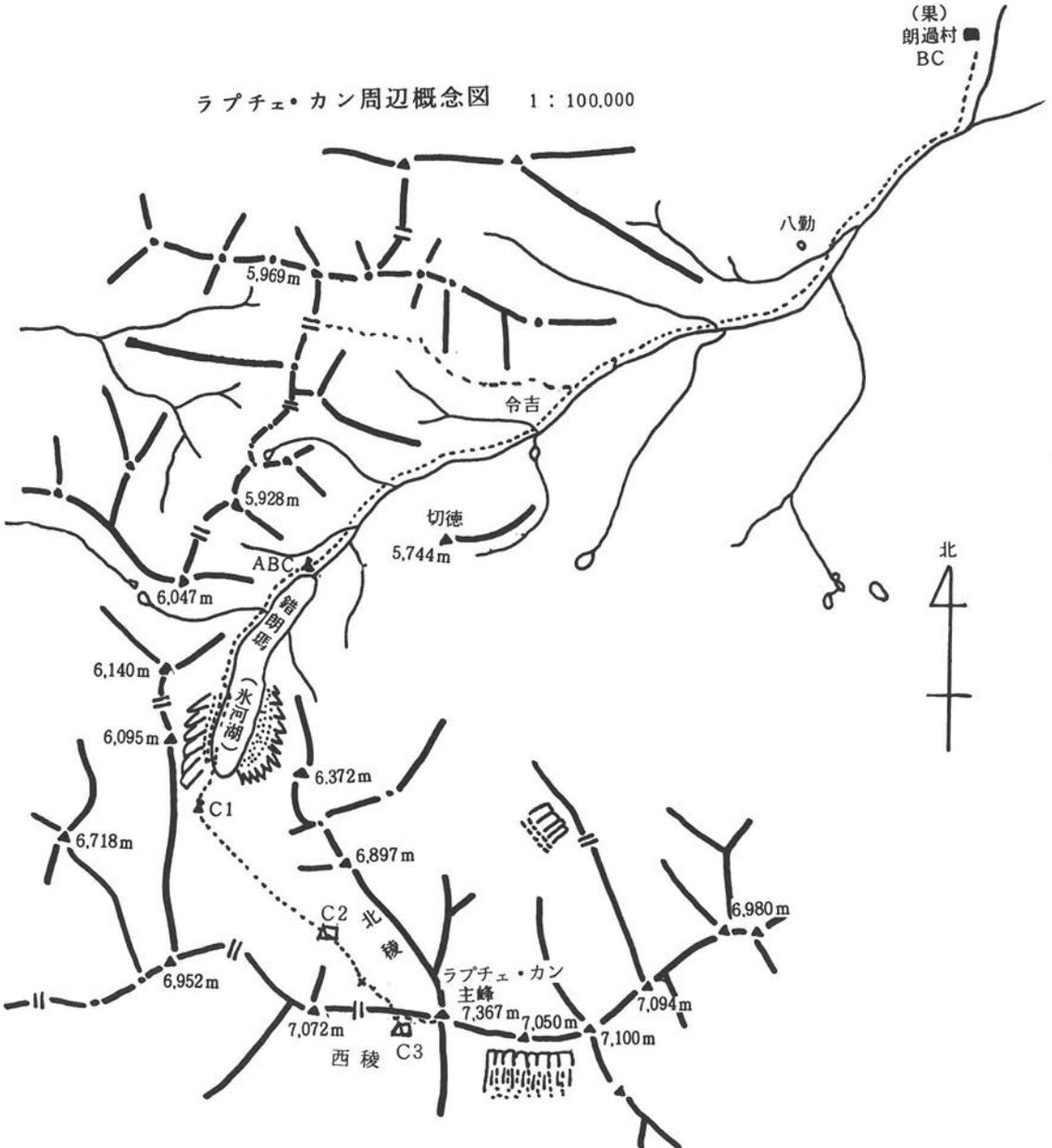
9時20分、古川とフィックス用のP・Pロープでアンザイレンをし、まだ陽の当たらないC1を出発する。

空はコバルト・ブルー一色に染まり、風も殆どなく絶好の天気である。

前日、出口と6,000m付近まで高度を体験済みの古川が先頭に行く。

C1を出ると直ぐ、やや急斜面を30分強程登る。所々、横に亀裂の入った箇所表面は雪に覆れている。

ラブチェ・カン周辺概念図 1:100,000



ここを過ぎると、前方に7,072m 峰が見え出し、双耳峰のピークを天に突き出している。そして、広く長大なプラトーが果てしなく続いている。この大プラトーに、ホワイト・アウト対策として竹ザオを立て、それに黄色の鳥追いテープ（荷作りひも）を張りながら進む。

1時間程で殆ど平な斜面となり、右手にはC₁背後より連なる双耳峰より少し低いピーク。左手にはラプチュ・カンの北稜。中央正面には双耳峰が聳え、その先は、広大なプラトーになっている。

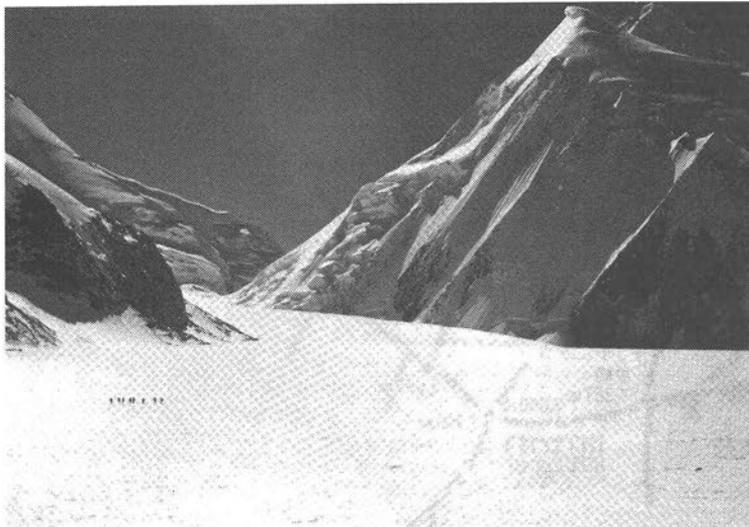
このプラトーを左上する感じで横切り、ラプチュ・カン北稜と双耳峰との狭まった左手のプラトーに入っていく。

プラトー上は常に風が流れている為か、程良く雪面が締っている。又、所々表面に氷が出ている。

左手のプラトーに入っていくと谷は狭まり、斜面も少し急になっている。そして、先程まで心地良く吹いていた風は、いつの間にか無くなり、ジリ、ジリと天と地から強烈に照らされてくる。

高度は6,000m 位になり、膝下までもぐる軟雪地帯となる。まだ順応の出来てない体には非常に辛く、休む回数が自然と多くなる。

そして、初めて前方にラプチュ・カンの全容が表われてくる。その姿は、山頂付近に少し岩が見えたり、所々、懸垂氷河が見えるが、実に女性的な山容で、西稜とは反対に北稜がゆったりと長く伸び、まだ、まだ先に続くプラトーの奥に、頂が雪煙をなびかせ、チベットの限り無く青い空に浮



▲ C2へ向かうチベット隊員と右は7,072m峰

▼C2へ荷上げるチベット隊員とソリを洩く橋本隊員



び上っている。

6,000m を越えた所で鳥追いテープが終わり、後は竹ザオだけを立てて行くが、登高は一向に捗らず、時間ばかり過ぎていく。

16時45分、高度約6,150m 地点に着く、まだプラトーは先に続き、西稜取り付きは遠くに見えるその下部は、プラトーが盛り上っていて見えない。

まだ、強い陽差しがプラトー上に注いでいるが、すでに時間も遅く、少し休んでC₁に下山する。

下山は、先程立てた竹ザオと鳥追いテープにそって下るが、テープは雪の色と同調し、程んど目立たず、その上、風で半分以上散切れ竹ザオも倒れ、ガックリしてしまう。

竹ザオが細いためテープを張りめぐらすと、少しの風でもかなりの抵抗を受けてしまうらしい。

鳥追いテープは思いの外、具合が悪いので、休養後の10月5日、古川・高橋と私の3名で、高橋の高度順応訓練を兼ねて、約6,000m 付近まで長さ60cmのスノーバー約20本を竹ザオの横に刺し、赤いシュリングを1本づつ括付ける。しかし、これも気休めにすぎず、殆ど目立たなかった。

そして、今度は10月13日、古川・田辺・高橋と私の4名でC₂入りをする際、スノーバーからシュリングを外し、赤いガムテープを張って標識整備をする。これも、アタックをひかえた10月18・19日の両日にかけての大雪で、スノーバーは完全に雪に埋まり、辛うじて裸の竹ザオが立っているだけであ

った。ホワイト・アウト対策として3度ルート整備を行ったが、殆ど役立たずに終わってしまい、結局、皆が歩いたトレールが一番の頼りになった。

尚、C₂は9月30日に竹ザオを立てながら到達した6,150m地点がキャンプ・サイトとなり、10月6日、古川・田辺・高橋と私の4名でC₂が設営された。

この日の設営の時、私はザックに個装を詰め、さらにスキーを使ってソリには30kg位いの共同装備を載せて行動した。軟雪地帯ではソリを引くのに少し苦労したが、一度にかなりの物資が運べ効果が大きかった。

又、始めの頃はC₂までアンザイレンして行動していたが、ルート上にクレバスが殆ど無く、何度か往き来してからは皆フリーで行動するようになった。

(記：須藤 圭一)

C₂ から C₃ へ

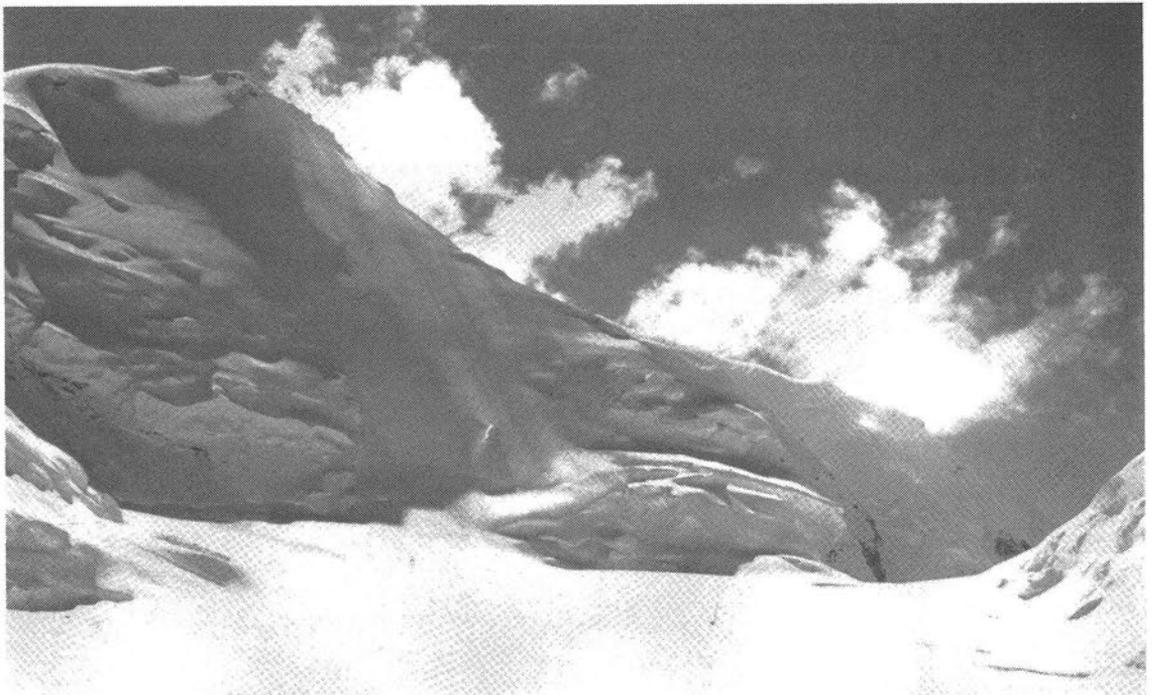
10月7日、C₂の朝はめっちゃくちゃに寒い。吐く息がすぐに凍るので、シュラフカバーの中がバリバリに凍りついた。さすがのゴアテックスも効果なし。6時30分起床、9時20分出発。C₂よりルート工作隊は古川、須藤、田辺、高橋。

▼西稜からネパール側の山々



ルート工作隊は膝までのラッセルでプラトーを横切り、西稜にむかう。古川のみスキーで登る。気温-22℃。オーバーシューズをはいていても足の指がジンジン痛む。凍傷になりそうだ。オーバーシューズのない古川、高橋は頻りにぼやく。

プラトーは7,072m峰と西稜の間まで続いているが、ここから先、南側はスッパリと切れおち懸垂氷河になっている。はるか下に荒涼としたロンシ



▲氷河からC₂と西稜を望む

▼西稜から南面の氷河を望む



ャールチューの氷河が横たわり、荒々しい山々がつづく。その中でひとときわ高く、中世ヨーロッパの城砦を思わせるような鋭峰があった。8,000mはありそうだ。「このへんで8,000m峰っといったらシヤパンマだんべ。」ということにきまる。後日、ABCで地図を囲んで喧々諤々議論した結果、ガウリサンカールであった。

西稜の取付きはセラック帯の右の雪壁にきめた。ここから右上して台地に出、広大な雪壁を直上すれば、西稜にぬけられる。

13時半、須藤トップで雪壁にとりつく。傾斜はあまりなく、ノーザイルでも大丈夫だが、後のことを考えフィックスを張る。3ピッチで台地に出て、ここでトップを古川に交代する。左から延びるクレバスを慎重にこえ傾斜の強くなった雪壁を3ピッチ登る。16時半、ガスが出てホワイト・アウト気味だ。今日はこれで終了とする。帰りのプラトーは、トレールがきえて歩きにくかった。華麗なスキーテクニックで下る古川氏を横目で見ながら、黙々とラッセルする。C₂着19時がっかり疲れた。

10月8日、ルート工作隊メンバーは昨日と同じ。

ルート工作隊は9時30分にC₂出発。朝の冷えこみは相変らず

厳しい。古川氏の体調が悪く、先の3人からひどく遅れていた。高橋君に古川氏の持つ荷物の荷上げを頼み、須藤、田辺でルート工作にむかう。2人でフィックス・ロープ7本、スノーバー7本を持ったため、結構重い。12時30分、昨日の終了点より田辺トップで雪壁に挑む。頭上にセラックが威圧的にそびえ、物凄い緊張感がある。しかし最初のクレバスを越えてからは技術的には楽勝だった。キックステップがちょうど快適にきまる雪

壁であった。まったくの処女の雪壁にピッケルとバイルをうちこみ一步一步ルートをひらくのは、山屋にとって最高の喜びだ。支点とするスノーバーもよく利いた。セラックの真横まで5ピッチフィックスをはって、トップを須藤氏にかわる。手持ちのロープとスノーバーが心細くなってきた。田辺「僕のがあと2本張ってる間に、高橋君がおいつくよ。」須藤「いゃ〜とどかねえよ。」結局、7ピッチ終了になっても高橋君はとどかず、ガスもあがってきたので今日は中止にする。明日の橋本パーティーにC₃予定地到達の夢をたくす。高橋は9ピッチ目に荷物をデポ、古川は6ピッチ目にデポした。C₂よりルートが延びてきて、前日のフィックス終了点まで行くのが大変になってき



▲未踏の6,940m峰の西面（偵察隊撮影）

た。いっそのこと取り付きに仮C₃を設けたらいいのに、と思う。C₂に帰ると、小川、橋本、森山の3名があがってきていた。僕達はみな疲れていた。今日は古川氏の誕生日だったがそれらしいことは何一つやってあげられなかった。せめて、1回1個の魚缶を2個あけて、古川氏の好物のF.D.納豆をつくった。(ちなみに私は納豆は大嫌いだ。)

10月9日、小川、橋本、森山の3名でC₂よりルート工作。古川、須藤、高橋、田辺はABCへ下山し休養。出口はC₁よりABCへ下山。

天気はやや悪く、ラブチュカンには雲がかかっていた。ルート工作隊は吹雪について昨日のフィックス終了点まで登ったが、時間がかかっていた。C₁で交信している出口さんの指示も最初、「頑張っただけでもC₃までルート工作をしてくれ。」から「せめて1ピッチでもいいから延ばしてくれ。」

▼第2次登頂隊(右:小川、左:高橋)



に変わっていた。結局1ピッチだけ延ばして降りてきた。これで次のローテーションでアタックをかけようという当初の予定を果すことが、できなくなった。

(記:田辺 治)

登山靴“没有”事件

それは山森隊長のABC復帰と、3回目の休養をおえて6,000mの高さにも順応し、7,000mの高みへ、C₃の建設を〆と意欲に燃えて出発した10月12日の出来事であった。

12時の交信で「デポ地の少し手前」の連絡。そして2時間後の14時の交信、「まだデポ地にいます」と田辺の声。思わず「何をしているのか?」と疑念が起ると同時に、「靴、その他がありません……」。「ナヌッ!?」思わず耳をうたがった。さらに田辺の声は続く「大きな津波があった様です、デポ品を乗せておいた土台の大岩からすべてありません」

「まさか——?」

「ずいぶんと探したのですが……、氷河舌端の大崩壊があったものと思われます」

「とりあえずABCへ戻れ」

「いや、上にチベット隊員のデポ品があるので、それを使って行動します」との判断。

紛失したのは、田辺のゼルブストバンドとユマール、出口・古川・田辺、3人の靴。

予想(だれが、湖面の2m以上もの急増を予想するであろうか)だにできなかった事態の発生である。「冗談じゃない、これからと云う時に!!」が

正直の気持であった。

代替品としては、山森隊長のゼルブストとユマールを田辺が、靴を古川が借りて使い、田辺は旺加の持っていた長靴(1960年、中国隊のチョモランマ登頂時のもの、と云う代物)を履き、出口はアプローチ用として持参した夏用登山靴を使う事で登攀を続ける事となった。

2cm以上も大きい靴を履いた古川は「踵がはずれそうナンデズ」とぼやき。ロシア兵、タナベイワノーヴィッチは、「チベットの連中は扁平足である、左右どちらでも履ける」と、チベット人の足形についての新しい学説を発表した。

じ病のうえに靴が合わないハンディを背負った古川、「われながら情けなくなる」とスタイリストの田辺、インナーブーツの代りに血流促進薬を塗りたくった出口。

後半の日程にそれぞれのボヤキとハンディを背負うこととなったが、登頂した事が全てを帳消しにして、思い出をさらに深くしているのは云うまでもない。そして残ったのは、3人とも靴を新調しなければならぬ事、変色した4本の爪としばれた10本の出口の足指である。

(記:出口 當)

第1次アタック敗退記

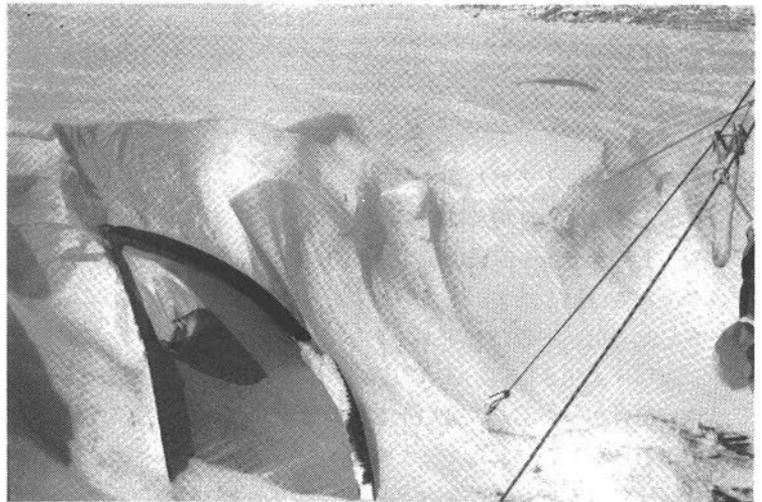
田 辺 治

ABCからC1までは長さ6kmの巨大な氷河湖の岸に行く。めずらしくガスが湧き出てまるでアラスカか南極みたいだ。C1は氷河湖よりアイスフォールをフィックス・ロープで12ピッチ登ったプラトーにあった。前日よりC1にいるチベット隊は、今日は悪天、ということで沈滞していた。小雪がふっただけなのにリキのない連中だ。天候は下り坂であり翌日は吹雪。入山して初めての悪天だ。日本の冬山でもよくあることだが、横なぐりの風が吹きつけ、雪がどんどんつもってゆく。チベット側がEPIガスをムダ使いしてC1用のガスが心ぼそくなってきた。1日中つけっぱなしにして暖をとっているから話しにならない。彼らは食料と燃料は無尽蔵にあると考えているらしい。文句をいっても始まらない。

夕食をすませ、外で小キジをうっていた時だった。突然ズシーンという地ひびきがして僕の体は宙を舞っていた。体中を膨大な量の雪が流れていく。雪崩だ。最悪の事態が発生した。必死におきあがって「みんな、大丈夫かー!!」と叫ぶ。すぐにチベット隊員が潰れたテントからはい出してきて除雪を始めてくれた。5基あったテントのうち3基が雪崩の直撃をうけてベチャンコになっていた。これで、けが人が出なかったのは不思議なぐらいだ。チベット隊登攀隊長のワンジャと相談する。暗くなってしまった今、この悪天について下山することは不可能だ。危険だが朝までここでがんばるしかない。残ったテントに僕達が入った時、第2の雪崩が襲った。「脱出しろ!早く!!」と悲痛な叫び。テントの中はパニックだった。やっとのことで外に出ると大気を雪が満たして

いた。

まずい状況になった。風は少しも衰えない。雪は容赦なく積ってゆく。いずれ第3の雪崩がくるのは必至だ。今までの2発は山の側壁からの雪崩であった。しかしC1の前に広がるプラトーの斜面が雪崩たら、テントごとアイスフォールにたたきおとされて、全員おだぶつである。登山靴をはき、手にナイフをもって臨戦体制でテントにこもる。1時間おきに除雪しないとテントが潰れてしまうので交替で除雪に出た。吹きすさぶ烈風の中、5,600mの高度で雪かきをしているとすぐ呼吸困難に陥ってしまう。テントの中に頭だけつっこんで息をととのえ、またスコップをふるう。湿雪のため体中が濡れた。寒い。テントの中ではローソクの火で雪を融かして白湯をのんだ。「こんなことなら会社で仕事してた方がよっぽど楽だな。」と思わず口に出てしまう。またどこからともなく「遺言書こうか。」という話が出る。正直のところ生きて明日のお天照様を拝めるとは思わなかった。隣のテントからはチベット隊員の祈る声が一晩中きこえていた。永遠とも思える長い夜だった。心配された雪崩は結局こなかった。天候は回復しつ



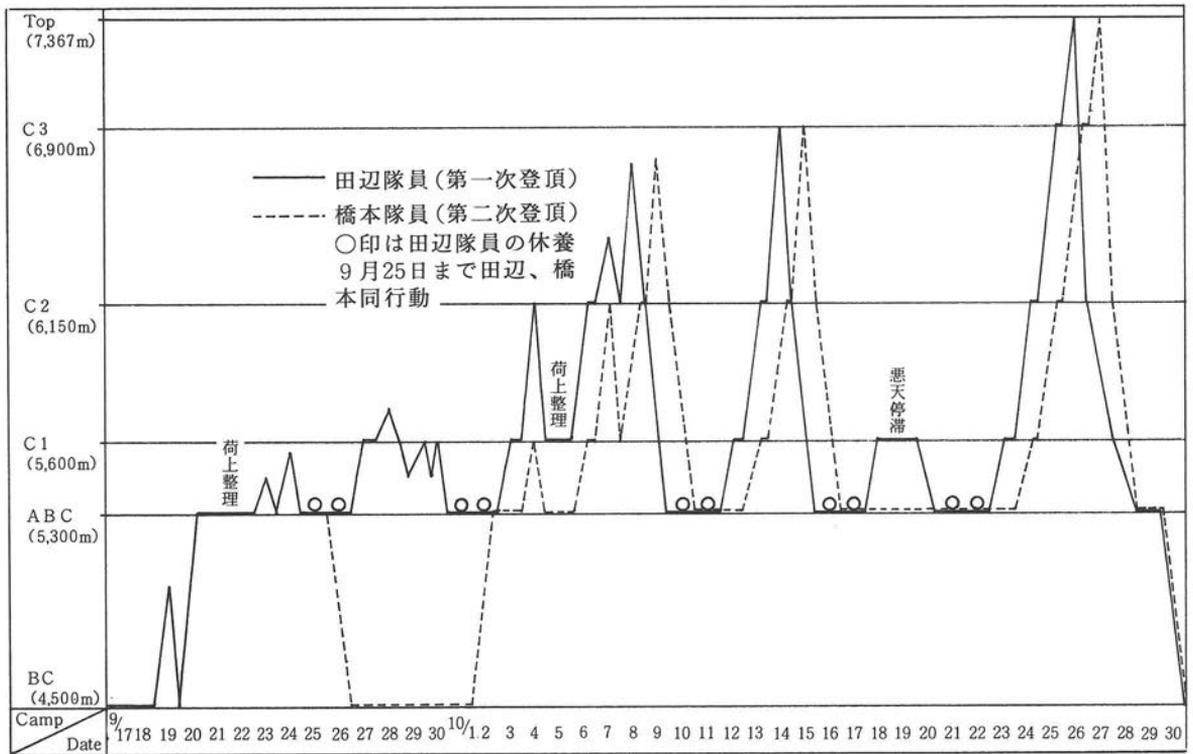
▲風雪で埋ったABCの女性用テント

つあったが地吹雪が激しかった。ABCへの帰り道、もうこれで終りだなという思いにかられていた。「ラブチェカン、ブハオ（不好）」とチベット隊員がなぐさめるようにいう。「うん、ブハオだね。」と微笑み返す。

2日の休養の後、ABCは議論にわれていた。チベット側隊長より選抜メンバー6名による頂上アタックの提案が出され、日本側はあくまで全員登頂を希望した。一度はほとんど手中にした山頂、これをあきらめるわけにはいかない。疲労がとれるとともにまた闘志がわいてきた。食料、燃料、日程ともぎりぎりまで全員登頂する分があった。結局、日本側の主張が通った。

10月23日、僕を含めた第2次アタック隊8名はC1へむかった。フィックス・ロープは雪崩でズタズタに切断されていた。埋没したC1の再建。翌24日、第2キャンプ（標高6,150m）。25日、アタックキャンプであるC3の建設。食料、装備ともギリギリなので絶対にミスはできない。

10月26日アタックの日。無風快晴。須藤・田辺のコンビでフィックス・ロープをのばしていく。あとのメンバーはユマールでこれにつづく。7,000mをこえるとさすがに息が苦しい。平地の1/2しか酸素がないのだ。1歩登るごとにゼーゼーと5回息をつく。急な雪壁を登り切るとリッジになった。もうすぐ山頂だ。ここでチベット側に敬意を表してトップをゆずる。あと1ピッチとっていたら3ピッチかかった。ウンジャはナイフエッジにあぶなげなくルートを切りひらいていく。そして13時50分、我々はずいにラブチェ・カンの頂上に立った。雪に被われた小さな頂。ここよりも高い所はもうどこにもなかった。チベット隊員も日本隊員もみな抱きあって泣いた。はるかチョモランマは我々を祝福するかのよう雪煙があがっていた。翌27日、第3次アタック隊の7名が頂上に立ち、ラブチェ・カン遠征は成功裡に幕をとじた。死ぬほどヒマラヤの好きな連中とゆかいなチベットの仲間たち。自分は1番幸せな人間だなあとつくづく感じた遠征でした。



登頂について

古川英勝

今日は登頂の日。あれほど恋焦がれた日。初めて経験する高度での幕営は、凜冽のためか寝つけず輾転とした夜を過ごし疲労と緊張のためか早々に目が覚める。4時半起床。天気は息をするだけで口ヒゲが氷ってつららが出来てしまう。太陽はラブチュの影になるため、陽は当たらず風は冷たくあまりの寒さと冷たさに時間迄凍ってしまいそうだ。オーバーシューズをはきアイゼンを付けようとするときオーバーシューズが凍って固くなりうまく締らず力で入れる。母がよこしてくれた真綿を足に捲きくつ下を毛糸にはき替えたがそれでも足は冷たかった。

C₃からのルートは我々日本側が先行しルート工作をしてのアタックなので体は否応なしに燃えてくる。あの峰この雪壁と自分でルートを選んで登る山はアクティブだと思う。誰もつけてない世界に自分たちのルートを見つけるのは“創造”である。雪山のもつ充実感のひとつではないだろうか。

C₃からの取付は幕場より急峻な雪壁で始まり、北米のマッキンリーのヘッドウォールよりもきつくした感じで雪の深さは膝下位迄埋まった。最初、須藤、田辺が先行し私がそのあとをフィックス・ロープ、スノーバー等を持って追いかける。ここで頑張らねば悔いが残ってしまう。幸い体調はすこぶるいい。朝食に入れた日本から持参した生ニンニクが利いたのか、それとも頂上に対する登頂意欲か兎に角心も体も完全燃焼しなければと思うと初めての高度に対する不安等もろもろのものは風と共に山の谷間に吹き飛んでしまう。(勿論、下山の体力は残して)

須藤、田辺によってたちまちザイルがはられてゆく。そのうちザイル等を持った中国隊4名とそのあと出口氏がユマーリングで登ってくる。いつのまにか太陽は高みをまし黎明のヒマラヤ山脈に朝日が照らし出され、ガウリサンカール、メンル

ンツェが赤く燃えていて壮麗な気持ちにならずにいられない。思わず写真を撮ろうとしても寒さのためシャッターが切れず難儀する。(メーカーの改善を望みたい。)

頂上に続く稜に出る手前は垂直に近い雪壁でアイゼンのツアッケしか入らない処もあり緊張する。トップは高度と自分との闘いで苦勞も多いが、あとでの喜びも何倍にもなることだろう。山登りは困難であればある程、又、苦しければ苦しい程達成感や満足感が得られるだろうと信じている。ようやく、10Pぐらいで雪稜に出ると、遠くにチョモランマ、チョー・オユーが高くそびえあかかも人間をよせつけないよう立ちはだかっている。先ほど見たガウリサンカール等は眼の下にあり、もう頭しか見えなくなった。

稜線へ出て頂上へ行く道は右側に雪庇が出ており左側は雪壁で落ちれば生の存在はなくなるので慎重を要した。あれが頂上だと思われる時トップの須藤は中国隊の登攀隊長である「旺加」^{ワンジャ}に先を譲った。よく本等で読んではいたが実際目の当たりに見ると感動せざるにはいられず胸が熱くなり血が騒いだ。

日本人に生まれてよかった。旺加は頂上と思われる処までフィックス・ロープを張るために稜のかげに見えなくなって時間がたち心配したがしばらくしてそこは頂上でないという。我々は張られたザイルにみちびかれ行ってみるともう1つ高い頂が視界に入った。そこがまさしく本当のピークであると確信し、我々は、はやる心を抑えながら一步一步高みへと足を運んだ。そして3P目(C₃より14P目)相前後して頂上へ立った。この他にもう高い処はない。『隊長、もうこれ以上高いところはありますか……。』(オメデトウよくやった。)'『隊長の靴をはいて登頂したので隊長も登ったのと同じです。』(アリガトウ、帰りは気をつ

▼西稜上C₃付近から見たメンルンツェ(左)とガウリサンカール(右)



けて下りる様に……。) 私の登山靴は氷河湖上部にデポしておいたがアイスフォールの崩壊によって津波が発生し私の靴等が流失してしまい山森隊の靴がなければ登ることは出来なかった。そして“持”病の悪化で寝返りも許されなかった時もあった。C₁での2度にわたる雪崩でテントごとつぶされ一晩中不安な夜をすごしたこともあった。日本でのBIKEとスキーによる転倒のアクシデントで遠征も締めなければと思った時もあった。だんだん苦しみの大きい順から思い出として蘇ってきてもるもろのものが走馬燈のように頭をよぎる。よかった。本当に良かった。天気、パーティ、etc全部ひっくるめても“僥倖”という言葉をしみじみ感じた。ここに立つことが出来たのも隊長や隊の仲間、職場、両親と皆んなのお陰と感謝し心で合掌。出来るなら皆んなにもこのパノラマを見せてやりたい。

なんとすがすがしいことであろう。重圧からの解放、そしてサクセス、厳しさからの充実。私は快哉を呼びたくなる衝動になる。思いもよらぬ天気の日頂上を踏むことが出来たここ何ヶ月間の緊張感が体から抜けてゆくのを感じられてしばらくは快い興奮が続いた。

出口さんの感涙にむせぶトランシーバーの交信を聞いていると私まで目頭が熱くなる。

早速、五星紅旗、日章旗、HAJの旗をかかげヒマラヤンブルーの空の下で記念撮影。チベット隊員はタルチョと呼ばれる経文の書いた祈とう旗

を出し祈っていた。

「小さな峰々の頂上を踏み次のピークの手招きでつついヒマラヤ迄来てしまった。何も技術も体力もない自分がここまでこれたのも常にヒマヤヤが頭にあったのではないか。普通の山行で岩も尾根もコースタイムの短縮を心がけ、冬も笑われながらも半袖で通し一年中裸足の時もあった。他人には変り者とうとまれても身を焦がす位山に対する熱き思いがそうさせたのかも知れない。」

この景色に陶酔する間もなく、次の目標の山が雪煙に舞い雲の上から頭を出し、あたかも私を呼んでいるみたいだ。雪に覆われた名も知らぬヒマラヤの峰々が俯瞰出来トレビアーン。この景色をあの人に見せてやりたいと思うこういう感情はその人を特別な感情で見ているからか。

もう少ししたい。出来るならもう少し……。然し時間という生物は無情である。寒気とともに時がせまり我々は勝利の愉悦に酔いながら後ろ髪引かれる思いで頂上をあとにする。

頂上直下は相変わらず急峻で下を見ることが許されず登る以上に慎重を要した。C₃へ戻ると中国側の2次隊が心から祝ってくれ残り少ない貴重なガスで湯を沸かし差し出された時は国を越え、言葉をこえても同じだと感激し2次隊も必ずや成功することを心から祈ってC₃をあとにする。

(コース・タイム)

〔起床(4:30)～出発(8:30)～頂上(14:05)(14:35)
～C₃(15:30)(16:30)～C₂着(20:40)〕

ヒマラヤの初登頂と合同登山

高橋 俊也

私にとって今回の遠征が初めての海外登山である。国内で冬の壁や、バリエーション・ルートを登ってきたとはいえ、ヒマラヤという所については私にとってまったくの未知の世界であった。それだけにあこがれというものは大きかった、「いつかは俺も!!」と夢をふくらましていた。自分の知らない事を知りたい。これは人間のだれもが抱くものだと思います。この気持ちが積もって今回の未登峰でもある「ラブチュ・カン」(7,367m)を選んだのです。初めての遠征で初登頂できた。しかし、この喜びよりも、初登頂するまでの困難な過程を経験できた事の方が私にとって大きかったような気がします。

国内の山では、他の人には絶対、体力的に負けない、精神力も負けない、という自信をもっていたが高所では半分の力もだせず、かなしばかりにあったように体が思うように動かなかったのは事実でした。

我々4人(古川、須藤、田辺、高橋)が膝をかかえながら、風雪の中を何回となく襲ってきた雪崩が「いつ又来るか、いつ又来るか」と、つぶされたテント2つを思いながら一昼夜を過ごしたC1での出来事。昼間は照りつける太陽と、雪からの紫外線で水ぶくれのように焼け、夜は-25℃以下まで下がる気温の変化での生活、気を付けながら歩いても何回となくクレバスに落ちてしまった事。いずれもヒマラヤを舞台にした初めての経験でありました。そして、あの頂上を踏んだ感激が今ここにあるのではないかと思います。頂上は天国の階段のように遠く見えた。一步踏みだすたびに5回呼吸し頂上まであと50歩、40歩、30歩、と強風の中、鼻水を凍らせながら数えたものです。頂上での隊長との交信では涙さえこみあげてきました。

頂上は、私達に白いカーテンだけを見せ、シン

ャパンマ、チョー・オユー、チョヨランマを仰ぐ事ができなかったのは残念でしたが、このピークに私の足が立っているという事で胸が一杯でした。すばらしい経験をいろいろできたと思います。これからの私の登山人生の新しいページが開けたと、今、考えたりしています。

今回の登山隊は、チベット隊9人との合同という点で、考え方の違い、意思の疎通のむずかしさがかなりありました。私達は山に登りに、チベット側は山を仕事にと、大きなギャップがあった。チベット側は、チベット登山隊という職場があり、その義務として来ている。我々は自分の意志で職場を捨て、多額な金を払いここに来ているのである。こうした立場の違うチベット側と日本側では、登山をする上で考え方が違う訳であります。

天候が思わしくなくても、我々は荷上げに出かけるが、チベット側は休養してしまう。キャンプ撤収の時も、酸素、テントを必要以上に持たなかった事などありました。チベット側隊員は、標高4,000mに生まれ、生活している。我々海拔0m近くで生活している者との、高所での体力の違い、ヒマラヤ登山しか知らないチベット側と、日本の冬山で育った我々の登山の方法との違い、登山をする上での相違点はかなりあったと思います。合同で登山するという事は大変だと、一隊員として思いました。しかし、休養日や登山の前後の日中友好はすばらしいものがあったと思います。お互いの言葉を覚え、ゲームやトランプをし、酒と一緒に飲み笑顔が絶えなかったのは今でも印象強く残っています。今こうして書いているとコックやドクターを含め一人々々の顔が脳裏をかすめます。民族的な違い、宗教も違う、生活習慣も違うチベット人との合同で登山をし、一つのピークをめざし、一緒に頂上を踏んだ。これはやはりすばらしい一つの出来事ではなかったのかと思います。

初めての高峰

通 訊 謝 家 貴

私は成都地質学院外国語教学部の教師です。今回は通訊として「中国友好ラブチェ・カン合同登山」の活動に参加させていただいたのは喜びにたえません。

1987年5月、成都地質学院登山協会は、中国登山協会から許可を受けて正式に成立しました。今回私に与えられた任務は、学院登山協会にとって初めてばかりではなく、私自身にとっても初めての経験でした。

ラブチェ・カンという山は、中国チベットのヒマラヤ山脈の一つの8,000m峰、チョー・オユーとシジャバンマの間に位置しています。この山に登るためには、チベットに入らなければなりません。私は今まで入蔵したことがありませんでした。

チベットは、海拔4,000m以上の高原地帯で、重量とした山岳が聳えています。そして酸素の量は平地の半分ぐらいしかありません。そこでは、体に変調をきたす恐れがあります。成都平原で暮し慣れた私にとっては、そこに行くことに不安がありました。しかし、何日か経て高山の環境に順応した後は、不安は去りました。

そこで登山隊に同行して、ベースキャンプから前進ベースキャンプ(5,300m)に登りました。次いで前進ベースキャンプの付近にある約6,000mの山の頂を踏みました。

成都では、毎日安定した生活を送っていますので、いつの間にか体が太ってきました。30才を過ぎると友人達は、時々「你髪福了」と云ってくれましたが、私自身もなんとかしなくてはダメだと云うことは知っていました。そのためもあって学院の登山協会に入会し、今回のラブチェ・カン合同登山に参加することにしたのです。

通訊には頂上まで登らなければならないという任務はありませんが、ベースキャンプから今回はもう一つ上のキャンプまで登らなければなりません。



んでした。標高差800m、長さ21kmの山道を歩くことは、登山経験の無い私には大変なことで、早いチベット隊員は6時間でしたが、私は11時間かかって前進ベースキャンプに着きました。身体中が疲労して倒れんばかりでした。前進ベースキャンプから下る時は、降雪の後でしたので一層大変でした。その光景は今でも目に焼きついており約2ヶ月の登山期間で体重は10数kgも減ってしまいました。

成都市では冬でも雪が降ることは稀れなことです。今回のラブチェ・カン登山中は、地元の人でさえ何十年も経験したことがないほどの積雪があり、激しい風雪が三昼夜も続きました。数時間で私達のテントは埋れてしまいました。夜も熟睡することができず、何回もテントの除雪をしました。

海拔が高い、山道が遠い、暴風雪、低温-22℃これらのことは、私にとって全て初めての経験でした。幸いなことに今回はこれらの困難を乗り越えることができました。また、登山活動を通じて登山についての様々な知識を得ることができ、一層登山に興味を持つようになりました。

今回の合同ラブチェ・カン登山は終わりましたが、来年もまた、登山隊の通訊として参加したいと、私の夢は大きく育っています。

愛らしいサミッター

1937年10月26日14時00分、チベット生れで17才になったばかりの少女「拉吉（ラジ）」は、ラプチェ・カン峰の頂上に立った。これは、7,000m峰の初登頂者としては最年少の記録と思われる。

彼女はチベット登山隊の隊員でチョー・オユー（8,201m）やナイブン（7,043m）の登頂者である「次仁（ツェリン）」の5人姉弟の長女として1970年9月にシガツェの近くで生まれた。もっとも父親の次仁もまだ35才である。

拉吉はチベット自治区が組織している「チベット登山隊（隊長・成天亮）」のメンバーである。父親の勧めで登山隊のメンバーになったらいい。この登山隊の隊員獲得方法は、農村に出かけてそれなりに有望な青年をスカウトしてくるらしいので、父親が隊員であればすんなりと受入れられたもうなづける。

登山での拉吉の働らきは抜群であった。何せ水汲み、洗濯、炊事から降雪でテントがすっぽりと埋まった時でも、鼻歌混りで軽々とスコップを操り、アッと言う間に除雪が終ってしまう。

仕草に男っぽい所もあったが、まだまだ17才、これからである。シガツェ付近の女性の結婚適齢期は17才～20才と言う。

登山隊に好きな人がいて、登山には反対だとも聞いた。山か結婚かとの質問にはなかなか答えられなかったが、どうももう少しの間は、山登りに専念するように思われた。潘多（パンドー）をこえる登山を続けて欲しいと思う。

おわりに

合同登山の難かしさは、現場にいないとなかなか理解しにくい。特に隊をリードする側と隊員の間には、合同に関する認識の差があり勝ちである。

今回の登山においては、日本側が平均年齢34才（主力は30代後半と40代）であるのに対して、中国側が隊長と副隊長を除けば、17才～25才と若く、人生経験、登山経験など両国側には、大きな隔たりがあった。加えて中国の登山は、仕事としての登山であり社会制度の違う国との合同であ



った。

このような、幾つかの立脚する立場の相違は、登山活動が進むにつれて忘れられ勝ちになっていく。このことは、高所での登山に慣れていない日本側隊員にとっては、多少止むを得ないことであった。

しかし忘れてならないことは、合同登山は相手のアラ探しや規則にのっとりた点検作業では無いことである。相互に違う文化の中で育った者同志が、違う事を認め合った上で、違う何かを求め合う事が主にならなければならぬと思う。そのためには、相手を思いやる「優しさ」が大切なのではないだろうか。

このことは、HAJの登山隊が「国内合同」を基盤としている限り、今後とも組織としての共通する認識でありたいものである。

（記：山森 欣一）

地域ニュース

《 ネパール 》

ネパール大使に有地氏

政府は11月17日の閣議で、ネパール大使に有地一昭ガーナ大使を充てることを決め、同日付で発令した。

有地 一昭氏（ありち かずあき） 59歳
23年外務省、25年中大法卒。

旅券課長、上海総領事などを経て、60年7月から現職のガーナ大使。

ネパール航空、日本へチャーター便

ロイヤル・ネパール・エアライン（RA）では、年末年始に混み合う日本人観光客のためにカトマンズ～名古屋間にチャーター便（B757, 190人乗り）をフライトさせることになった。

今、年末年始のチャーター便は、以下の通り。

（第1便）

12月27日	11:00	名古屋発
↓	17:00	カトマンズ着
1月2日	22:00	カトマンズ発
1月3日	9:00	名古屋着

（第2便）

1月3日	11:00	名古屋発
↓	17:00	カトマンズ着
1月9日	22:00	カトマンズ発
1月10日	9:00	名古屋着

※因に料金の方は、名古屋～カトマンズ間の往復で27万円との事。

マナスルで遭難

マナスル（8,163m）の東稜に再挑戦していた青森県山岳連盟マナスル登山隊（松島静吾隊長ら15名）の工藤一義隊員（43）が10月28日の夕方、意識不明となりベース・キャンプで死亡した。この為、同隊は登頂を断念して下山した。同岳連隊は1985年のポスト期にも同峰の東稜に挑んだが、悪天候の為、6,300mで断念している。

その他、前号で報告できなかったポスト期の日本隊は次の通り。

○アンナプルナII峰（7,939m）

南西壁からの登頂を目指していた近藤国彦、山本一夫両氏のベアーは、南西壁を7,500m迄登ったが、悪天候と山本隊員の足が凍傷になったため10月18日に下山した。

○ダウラギリI峰（8,167m）

北東稜からの登頂を目指した福岡登山研究会隊（三苦達久隊長ら5人）は、7,299mまで達したが、悪天候のため10月12日に断念した。

○ダウラギリI峰（8,167m）

単独で南壁の新ルートに挑んだ青田浩氏（29）は、ルート上の雪に阻まれて、10月10日に断念した。

冬期ヒマラヤへ日本隊出発

○アンナプルナI峰（8,091m）

群馬県山岳連盟隊（八木原暎明隊長ら13名）が1984年～85年の冬期に挑んだ南壁（英国隊ルート）に再挑戦する。

同隊は10月21日に先発隊、28日に本隊がそれぞれ日本を出発して現地に向った。一行はアンナプルナ内院にBCを建設した後、周辺のタルプ・チュリ（テント・ピーク）などで高度順化を計ったあと、12月1日から南壁に取り付く。

一方、同じI峰の北面ルートにはカモシカ同人隊（大蔵喜福隊長ら5人）が挑む。

○アンナプルナ・ダクシン（南峰、7,219m）

栃木の宇都宮白峰会隊（山形正己隊長ら8名）が南壁から同峰の冬期初登頂を目指す。

同隊は11月14日に先発隊、18日に本隊とそれぞれ日本を出発して現地に向った。予定では11月28日にキムロン氷河の4,200m地点にBCを設けた後、12月1日から登山活動を開始する。登山活動期間は約30日。

《 パキスタン 》

冬のバルトロ氷河へ

“より高く、より困難”を標榜するHAJの仲

間達が、今、1989～90年冬期K2登山を目標に準備を推進している。

この計画の第一ステップとして隊長・飛田和夫(41)、隊員・熊田雅史(31)の両氏が冬のバルトロ氷河偵察の為、12月4日、日本を出発した。一行は1月下旬迄現地に滞在して、バルトロの偵察や今冬K2に入山している国際隊との情報交換などを行う。帰国は2月中旬の予定。

《 中 国 》

貴石の枯れ湖発見
— 内モンゴル —

11月3日、フホト発の新華社電によると、中国・内モンゴル自治区のバイエンヌル(巴彥淖爾)とアラシャ(阿拉善)の間のバイエン砂漠(ゴビ砂漠の一部)で、湖底が貴石で覆われた枯れ湖が発見された。

この湖底は数平方キロメートルにわたって空港の滑走路みたいに滑らかだと云う。これまでの探査で1平方メートルあたり平均400から500個のメノウや碧玉がみつまっている。

現地の牧畜民の話では、この湖(通称メノウ湖)が干上がったのは、つい2、3年前の干ばつ期。昔、仙女が水浴びした場所で、ある日、飛び立つのを邪魔されて、きらびやかな石の数々を残していったのだと云う伝説も残っている。

内モンゴル自治区は中国で最もメノウ埋蔵量が多い。地質学者は、玄武岩から成るこの砂漠は1億年以上も前に火山が噴火したところ。高熱によって火山岩の穴がメノウ、碧玉で埋まることになったとみている。

インフォメーション

東京集会のお知らせ

12月の東京集会は、忘年会を兼ねて下記の通り開催致します。集会では、今秋出かけたHAJの中・ソ辺境旅遊隊のスライドを観ながら、'88年の夢でも語りしたいと思います。

日時 12月21日(月)午後7時～
場所 HAJルーム
会費 1,000円

事務局の年末年始

御用納め 12月25日(金)
仕事始め 1月6日(水)

第9回インドヒマラヤ会議開催

新春恒例のインドヒマラヤ会議を下記の通り開催致します。今回で9回を重さねるこの会議は、インドヒマラヤへ出かける人のための情報交換会議です。会議には1987年にインドヒマラヤへ出かけられた登山隊の方に出席して頂き、最新の現地情報を提供して貰います。その他、インドヒマラヤの「ノウ・ハウ」や事故対策など盛り沢山の内容となっております。インドヒマラヤの登山計画や関心をお持ちの方は是非ご出席下さい。

記

1. 日時
1988年1月10日(日)9時～16時30分
2. 場所
目黒さつき会館
(JR山手線・目黒駅下車徒歩5分)
3. 会費
2,500円(資料代を含む)
4. 定員
50名(定員になり次第締切)
5. 申込み
会費を添えて日本ヒマラヤ協会事務局まで。
〒160 東京都新宿区高田馬場3-23-1
淀橋食糧ビル506号
6. 締切り
12月21日(月)
7. 内容
 - 許可取得から出発までの問題点
 - 最新の現地情報
 - 1987年登山隊報告(カシミールからガンゴトリまで5隊を予定)
 - 事故対策と処理
 - 1988年隊の情報交換、他

インド・ヒマラヤ編(7)

エージェント

前号でも記したように、ここでは“ヒマラヤ登山入門”と云うことなので、初めてインドを訪れる登山隊がエージェントを使った場合の現地渉外業務について述べることにする。

インドに於いてエージェントを使う場合は、到着後、最初に行くべきところかも知れない。従って、ホテルに着着いたら、先ず、翌日からの日程についてエージェントの担当者と打合わせをする。

登山隊は、自分達の行動予定を伝え、事前に締結した契約(Agreement)に基づいて、日程スケジュールが予定通り進行するようにエージェントをうまく使うのがコツである。

契約が全てを依頼するような形で締結したのであれば、日本大使館やIMFへの挨拶、現地での買い物などにもエージェントの社員を付けて貰い短時間で用事を済ませてしまうのもエージェントをうまく使う方法であろう。エージェントをうまく自分達が使うのか、逆に相手の云いなりに振りまわされるのかでは、大きく違って来る。エージェントをうまく使い、時間をお金で買うんだと云うように促えればそれほど高いものではない事を申し添えておく。

航空券(Ticket)は、エージェントに預けて帰国便の予約再確認(Re-confirm)をしておいて貰うこと。

日本大使館

登山隊はデリーに到着したら、山へ向う前に必ず日本大使館へ挨拶に伺う事。登山隊が万一遭難事故を起した際に一番お世話になるのは大使館である。

尚、大使館を往訪する際には必ず出かける前に

アポイントを取ってから伺うようにしたい。

一大使館への必要書類及び連絡事項一

- 和文登山計画書
- サマリー(登山隊の行動概要を記したもの)
- 最終メンバー・リスト
- デリーにおける登山隊連絡先
- 日本における登山隊留守本部の連絡先
- 緊急時における連絡網
- 大使館宛て便宜供与依頼書及び念書の写し(事前に送付したもののコピー)
- 外務省宛て願い書及び念書の写し(外務省に提出したもののコピー)

IMF (Indian Mountaineering Foundation)

登山隊は、デリーに到着したら速かにIMFに赴き以下の諸手続を踏まなければならない。

- 1) 入国の挨拶
- 2) 隊荷通関用の保証書の交付依頼

隊荷発送時のパッキング・リストをIMFに提示し、輸入物品の全てが登山隊の登山用隊荷であることのUnder taking(保証書)を空港税関関税徴収官補宛てに書いて貰う。

正式な宛て先は、下記の通り。

The Assistant Collector of Custom,
Central Ware Housing Corporation,
New Delhi.

この書類によって隊荷の無関税通関措置がとられる。

- 3) ウォーカー・トーキーの特別輸入許可証及び開設許可証を交付して貰うために通信省宛ての保証書(Under taking)を書いて貰う。

- 4) 最終メンバー・リストの提出

メンバーの変更があった場合は、最終メンバーリストを提示して届ける。この場合、メンバーの

取り消しについては問題がないが、新たにメンバーの追加があった場合、そのメンバーがエントリー・ビザを取得していないと問題になるので注意を要す。

5) 誓約書の提出

緊急時にヘリコプター等を要請した場合、それらのレスキュー費用を支払う事。各キャンプのゴミの後処理、自分達が使用する燃料は必ず持参し、むやみに樹木を伐採しない事など7項目にわたる事項についての誓約書を提出する。

(この様式は、アプリケーション・フォームに添付されており、現在ではその用紙に日付とサインを記入して正式アプリケーション提出時に一緒に提出するようになっている。)

6) リエゾン・オフィサー (Liaison Officer) とのブリーフィング

登山隊は、自分達の行動予定 (ニュー・デリー出発予定日など) を伝え、リエゾン・オフィサー (L・O) とのブリーフィングを早急に行う必要がある。

「入国通知」の項でも触れたように、事前に送付する入国通知の中でL・Oとのブリーフィング日時を指定しておくことと日程に無駄がない。

L・Oとのブリーフィングでは、IMFの担当者から外国登山隊の行動や撮影に関する遵守事項・注意事項についての話しがなされる。

ブリーフィングを終えたらL・Oに支給(貸与)装備のチェックをして貰う。通常は、隊荷のキープしてある宿舎(ホテル)で点検されるので、わざわざIMFへ持参する必要はない。

インドでの通関

インドでの通関を我々外国人が独自で行おうとする場合は、かなりの困難さと時間が必要となるであろう。そのため、隊荷を別送した殆どの登山隊はエージェントを使って通関しているのが現状である。エージェントの方も自分の会社に通関業務の部門が無い場合、さらに別の通関専門業者に依頼して通関しているようである。

次に、通関に際しての一般的な手順を述べてみよう。

先ず、隊荷の荷受人 (Invoice の Consignee の

ウォーキー・トーキー輸入許可承諾書

Government of India
Ministry of Communications
(W.P. 1186)
New Delhi

Sardar Patel Bhawan, Sardar Square, Parliament Street, New Delhi.

No. L-14221/84/00-12 Date: 25.8.1980

To
Mr. Yoshitake Okida,
Leader Himalayan Association of Japan,
C/O Indian Mountaineering Foundation,
18 1st Floor, New Delhi - 110011.

Subject: REQUEST FOR EXPORT LICENSE PERMIT
FOR TRANSMITTING APPARATUS FOR WIRELESS TELEGRAPHS (WTG) FOR EXPORT TO INDIA.

Reference: L-14221/84/00-12 dated the 25th January 1980.

The undersigned is pleased to inform you that the Government of India has granted the licence for the export of WTG for export to India.

Yours faithfully,
R. P. Kumar
Joint Secretary to the Govt. of India.

ウォーキー・トーキー輸入許可証

GOVERNMENT OF INDIA
MINISTRY OF COMMUNICATIONS
(W.P. 1186)
NEW DELHI

LICENCE TO EXPORT TRANSMITTING APPARATUS FOR WIRELESS TELEGRAPHS (WTG)

Registered No. L-14221/84-00-12 New Delhi, dated 25.8.1980

In pursuance of Notification No. 71-Customs, dated September, 3rd 1953 issued under Section 19 of the Sea Customs Act, 1878 (VIII of 1978), the Ministry of Communications of the Government of India (hereinafter called the Ministry) hereby grants to

Mr. Yoshitake Okida,
Leader Himalayan Association of Japan,
C/O Indian Mountaineering Foundation,
18 1st Floor, New Delhi - 110011.

(hereinafter called licensee) during the term or period commencing on the day of the date hereof, and terminating on the 31st day of December, 1980 licence and permission to import at _____ New Delhi, the following transmitting apparatus for wireless telegraphs:-

Item No.	Description of Apparatus	Quantity
12	Transceiver Matsui Sony Co. Ltd. Model: 22E - 650	3 Nos.
22	Transceiver Matsui Sony Co. Ltd. Model: 22E-300	1 No.

The 25th day August of 1980

Signed by the licensee _____ in the presence of _____

The day of _____ 19 _____

4/79*

人) になっている人は、エージェントの担当者を伴ってインディラ・ガンジー国際空港のエア・カーゴ部門に行って隊荷の到着を確認する。

次に入国時に提出した Disembarkation Card の下半券を受取る。Consignee の人は入国時に必ずアナカンによる別送品があることを申告しておかなければならない。

アナカンで送った別送品は、空港倉庫に24時間ホールドされた後、空港から少し離れた場所にある Central Ware Houseing Corporation, Import Aircargo の倉庫に移され、ここで通関することになる。

一 通関に必要な書類一

- 1) IMF から税関の関税徴収官補に宛てた無関税通関措置のための Under taking.
- 2) ウォークー・トーキーの輸入許可承諾書 (Grant of WPC Import Licence)
- 3) ウォークー・トーキーの輸入許可証 (Licence to Import Transmitting Apparatus for Wireless Telegraphs into INDIA)
- 4) ウォークー・トーキーの使用許可証 (Authorisation of Frequency Usage and Permission to Operate Wireless Stations under I. T. A., 1885)
- 5) Disembarkation Card の下半券
- 6) パッキング・リスト

隊荷発送時のファイナル・パッキング・リストを少なくとも 6 部は用意したい。

- 7) Air Way Bill のオリジナルとコピー
- 8) Consignee のパスポートと航空券

これらの必要書類の他に和文のパッキング・リスト及びその Index を持参すると便利である。

実際の通関は、担当者の指示に従って何箇所かの窓口をまわり、その都度サインをさせられた後、漸く自分達が送った荷物が運び出されてきてご対面となる。

荷物はフル・オープンを命じられることもあれば、ウォークー・トーキーやラジオの入ったカートンが 2~3 個オープンされるだけで済む事もある。巡り合った担当官と同行したエージェント・スタッフの腕によって運・不運が左右される。

カートン・ボックスのオープンは急ぐ必要がな

いから 1 個ずつ云われたボックスを開梱すればよい。開いたら必ず再梱包してから次のボックスを開けるようにする。何個かのボックスを一度に開けてしまうと目が届かなくなり、結果的にパッキングリストの数量と中身が合わなくなりかねない。

通関の際、荷物が開けられないことは無いので P P バンドやガムテープなど若干の梱包用具は持参すべきである。

ウォークー・トーキー使用許可証

(表面)

SECRET

INDIAN AIR FORCE
COMMUNICATIONS SECTION
NEW DELHI-110001

Ramesh Sharma, 10, Anand Road, New Delhi-110001.

No. LI/1001/84/20-12 Dated 19-5-1985

To
Mr. Yoshitake Oshida,
Leader Himalayan Association of Japan,
O/O Indian Mountaineering Foundation,
18 "B" Block, New Delhi-110017.

Subject: Authorization of frequency usage and permission to operate wireless stations under I.T.A., 1885.

Sir,

I am directed to refer to above letter No. 1982-207/79 dated 1-7-80 and the related correspondence and to state that you are hereby authorized to operate wireless stations on the frequency and other parameters indicated in para 1.2 below with effect from 18-5-1985 to 18-5-1986.

2. Regular licence documents will follow when they are ready

3. 1.) Licence authorization No. : LI/1001/84/20-12
 2.) Purpose of licence: To facilitate communication during the expedition.
 3.) Nature of service (essential): Operational
 4.) Particulars of station (s)

Location of the station(s)	Design	Type of station	Location or area(s) when it is intended to establish communication
1. Mobile around Kedarnath (Annual)	Kedarnath 1	Mobile	WHN similarly licensed stations of the licensee
2. do-	Kedarnath 2	"	do-
3. do-	Kedarnath 3	"	do-
4. do-	Kedarnath 4	"	do-

CC

(裏面)

- 2 -

3.5) authorized parameters - associated parameters:

Frequency (as per I.T.A.)	Power Class & Band width of transmission.	Power output in watts. (100)	Nbr. of ops. (100)	Equipment
25.785 MHz (25.774 MHz)	500W (on 500 & 575)	500 mW	2-24	Shry Co. Ltd., 1) ICH-510 (3 Nos.) 1) SIA-100 (1 No.)

NOTE: 1. An amount of Rs.250/- towards the licence fee, royalty and import fee has been returned.
 2. The valid-tickets rate should be presented for inspection in consultation with I.M.F.
 3. If the valid-tickets rate should be re-reported after the expedition is over.

The receipt of this communication may kindly be acknowledged.

Yours faithfully,
 (S.M. KHAN)
 Assistant Director (I.T.A.)
 to the government of India

■ 寸 感 ■

晩秋に入るとどう云う訳か、いろんな催しが多い。この11月には各地で海外登山に関する研究会や報告会が開催された。

立場上、年に何回かこうした研究会などの主催者側として準備に携わることがある。最近は、以前に比べて海外登山の情報も溢れるばかりに氾濫しており、いろんな形で入手し易くなったせいか、こうした会合を開催してもそれほど人が集らなくなってきているようだ。

研究会などでは、大抵の場合、幾許かの参加費を「資料代を含む」と云う形で徴収して資料が配布される。ところが受付に座っていると、「これで〇〇円も取るのですか」と聞かれる事がよくある。資料の値段とはいったい何んなのであろうか。どうも資料と云うものはそこに盛り込まれた情報なりデータの価値は評価されないで、1枚〇円のコピー料金で判断されるらしい。コピーと云う武器のお蔭で、資料作成の労力を知って貰うことはできないようだ。

事務局日誌 (11月)

- 6日(金) Capt. M.S. コーリー氏と会談
(尾形)
9日(月) ラプチェ・カン登山隊帰国

- 11日(水) ヒマラヤNo.193発送
14日(土)～15日(日) 東京都山岳連盟海外登山研究会(飛田、尾形)
16日(月) 来日中の中国国際文化交流中心理事会四川省分会の陳学群秘書長と会談(遠藤、山森)
18日(水) 事務局打合わせ(稲田、山森、尾形)
21日(土) Capt. M.S. コーリー氏とヒマラヤン祭の打合わせ(尾形)
28日(土) 第8回日本ヒンズークシュ・カラコルム研究会(山森)
28日(土)～29日(日) 第1回東北地区海外登山研究会(山森、尾形)
30日(月) 東京集会(26名)

ヒマラヤNo.194 (1月号)

昭和62年12月10日印刷 63年1月1日発行

発行人 遠藤 登
編集人 尾形 好雄
発行所 日本ヒマラヤ協会
〒160 東京都新宿区高田馬場3-23-1
淀橋食糧ビル506号

— 天府の靈峰 —

雪 宝 頂

1986年夏、H A Jは四川省登山協会との合同で岷山々脈の最高峰、雪宝頂(5,588 m)へ登山隊を派遣した。登山は日中登攀隊員14名中、13名が8月5日、6日の両日に亘って初登頂に成功した。此の程、この日中友好の足跡を記した報告書が上梓された。

B5版、64ページ、カラー写真8ページ、モノクロ写真多数

(頒 価) 1,700円(送料込み)

(連絡先) 〒-160 東京都新宿区高田馬場3-23-1
淀橋食糧ビル506 日本ヒマラヤ協会

— 古切手のご協力 —

ありがとうございます

(社)日本キリスト教海外医療協会(JOCS)では、使用済みの切手を集めて世界市場に売り出し、その収益金でネパールをはじめとする医療後進国の援助に役立てております。古切手200枚でBCG1人分になります。

この古切手収集に下記の方々からご協力を賜りました。お送り頂きました古切手はH A Jが一括してJOCSへ送らせて頂きました。

伊藤守、マウンテン・トラベル、大藤たか子、二俣勇司、黒沢文代、江尻健二、林尻悟、古川英勝(敬称略、順不同)

TREASURE TOUR



EXPEDITION & TREKKING

自分の旅だから、自分でつくる。そんなあなたを応援いたします。

—— 遠征隊、トレッキング、秘境への旅 ——

あらゆる申請・許可取得、現地手配、航空券、山岳保険など、
お客様のご要望に遠征経験豊富なスタッフがお答えします。



マウンテントラベル株式会社

〒105 東京都港区新橋3-26-3 会計ビル4F

☎03-574-8880

三井航空サービス代理店2452号

カラコルムの秀峰 ウルタル山



遥かなる高み

トレッキング・登山隊の許可取得から航空券・現地手配までお引き受けいたします。
～ネパール・インド・ブータン・パキスタン・東南アジア・アフリカ・南米～

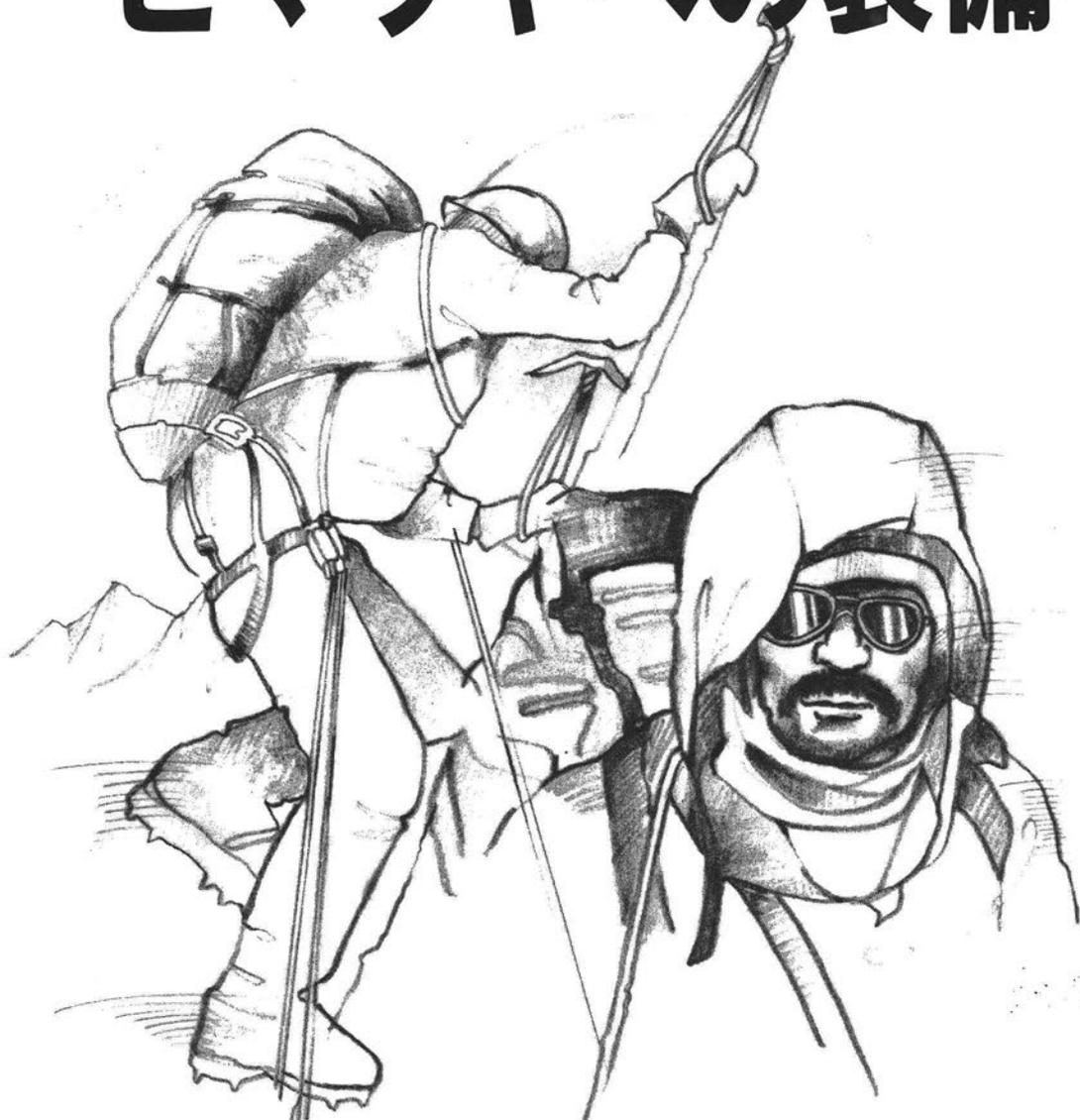
トレッキング・海外登山
シルクロード・秘境旅行
のパイオニア



株式会社 西遊旅行

東京本社 〒101 東京都千代田区神田神保町2-2 新世界ビル5階 ☎03(237)1391(代表)
大阪営業所 〒541 大阪市東区平野町4-53-3ニューライフ平野町202号室 ☎06(202)1391(代表)
カトマンズ営業所 JAI HIMAL TREKKING (P) Ltd. P. O. BOX 3017
KATHMANDU, NEPAL ☎221707
運輸大臣登録一般旅行業607号

ヒマラヤへの装備



◎遠征隊の装備、相談にのります。



ICI 石井スポーツ

- 登山本店 / 〒160東京都新宿区百人町2丁目2番3号 ☎03(208)6601~3
- 大宮店 / 〒330埼玉県大宮市宮町2丁目123番地 ☎0486(41)5707
- 水道橋登山店 / 〒101東京都千代田区三崎町2丁目8番14号 ☎03(264)5575~6
- 神田登山店 / 〒101東京都千代田区神田神保町1丁目8番地 ☎03(295)0622
- 新宿西口店 / 〒160東京都新宿区新宿1丁目16番7号 ☎03(346)0301(代)
- 高崎店 / 〒370群馬県高崎市新町6番地 ☎0273(27)2397(代)
- 札幌登山店 / 〒060北海道札幌市中央区南二条西4丁目4番 ☎011(222)5305
- 新潟店 / 〒950新潟県新潟市東大通2丁目5番1号 ☎0252(43)6330
- 仙台店 / 〒980宮城県仙台市東八番丁107番地の36号 ☎0222(97)2442
- 町田ジュルナ店 / 〒194東京都町田市原町田6丁目6番地14号 ☎0427(26)6248(代)
- フーズショップ / 〒160東京都新宿区百人町2丁目2番43号 ☎03(232)1286
- 外商部 / 〒160東京都新宿区大久保2丁目19番10号 ☎03(200)7219
- 事務所 / 〒160東京都新宿区百人町1丁目4番15号 ☎03(200)1004